



# 中高生とともに差別と闘う

## 『人権学習から学んだこと』

吉成タダシ



葛藤してきたからこそ

「私自身、高校の時に付き合ってた人がいたんですけど、その人が地区出身の人で、お父さんとお母さんに、『付き合うのはいいけど結婚するのは駄目よ』って言われて。あれだけマミのごとで悩んで、マミと一緒に闘っていいこうって決めたのに、そのとき私はお父さんとお母さんに反抗できなかった。

じゃあ今はできるかって言われたら、今お母さん、癌になって闘病しててつらい状況で、そんな状況の中で、私が中学の時みたいに熱い気持ちで部落差別のことでお母さんと闘っていいかって言われたら、今はできないと思う。これ以上お母さんに負担をかけたくないから。何が悪いとか決めつけるっていうのは違うなって思ったし、いろいろ葛藤してきたけど、でもこうやって葛藤してきた自分だからこそ分かる人の気持ちもあるんじゃないかなって、今になって思ってます。」

「差別者」として、切り捨ててしまいたくなるような気持ちになったことが、私には何度となくあります。怒りにまかせ、激しい感情を、友人や同僚、自身の親にぶつけ、罵倒したことが私にはありました。どうしても許せなくて対立したのでありますが、今はそんな自分を情けなく思います。これまでどれだけの年月を費やし、同和教育運動や解放運動を推し進めてきた先人がいたか。そんな先人からいつたい私は何を学

んできたのか。差別的な発言や、ヒトゴトのような発言を放つたらかしにするのが良いとは思いません。でも、だからといって対立し、切り捨ててしまうことが本当の解決につながるわけでもありません。

異なる価値観との出会いは、新しい発見につながりますが、それが受け入れ難いものであれば、つながり続けることは思いのほか苦しいものです。そこから目を背けず向き合うまでに、私は随分と時間がかかりました。それをマキは、中学時代からずっと続けてきたのでした。

### 人権学習がマニュアル

「私、去年一年間、看護実習に行っていたんですけど、その実習の中で一人の患者さんと出会ったんです。その人は脳症って、脳の病気がかかって、しゃべることも話すことも食べることも何にもできなくて、植人物人間みたいな状態で。コミュニケーションもとれないし、私は正直、「うわー」と思って。周りの子は患者さんといっぱい話したり楽しいことしてるのに、私はただ黙々と何も話もないなか看護をしていくっていうのは苦しくて。」

その患者さん、自分で痰を出すこともできないんです。毎日気管吸引してる患者さんだったんですけど、マニュアルで決められてて、二時間ごとに気管吸引をするって。けどある日、「かはっ」て吐いたんです。痰を。それもさつき痰をし

た一時間後に吐いて。でも決められてるのは二時間。でも本人は苦しんでる。それを見たときに、自分はマニュアルとかその人の疾病しか見てなくて、その人自身を見てなかったんだっていうことに気づいたんです。そのとき、自分であれだけ人権の学習をしてきたのに、結局は目の前の固定観念にとらわれて、その人自身を見てなかったんだってことに気づいたんです。」

この場面で人権学習が登場してくるのか、と少し苦笑してしまいました。マキにとっては、そこがツボだったんですね。そう思うと、人権学習の汎用性は、もともと多様であるといえるのかもしれない。

### 心を寄せること

「人間って聴覚だけは最後の最後まで聞こえるので、それからは話しかけたり、手をさすったり、些細なことなんですけど表情を見たり。そういうのを毎日毎日繰り返ししてたら、実習最終日、もう今日で別れですっていうあいさつをしたときに、今まで一回も反応をしたことがなかったんですけど、首をいやいやって横に振ってくれたんです。本人がどういう気持ちでしたのか分からないんですけど、それを見たときに、人間同士ってこういうこと

なのかなって。立場とか住んでる場所とか、見た目とかいろいろ違いはあるかもしれないけど、結局は本

質を見ようとしてその人のために何かをしようとして努力したら、返ってこないこともあるかもしれないけど、相手のために心を寄せることが、一番大事なんじゃないかなって思いました。

みんなもたぶん、これから人権問題を考えていくうちに、いろいろな狭間に立つこともあると思うし、私自身も苦しかったこともいっぱいあったし、人権問題で親とけんかしたこともあったし、何が正解かも分からなかったりするけど、ちゃんと相手に心から関心を寄せて、自分自身と自分の大事な人がちよっとでも幸せになれるような選択肢が増えていくことが、人権を学んで良かったって思えることじゃないかなって思います。うまく言えなくてすみません。以上です。」

マキが学んだ人権学習は、直接的な人権活動にはつながっていないかもしれない。でも、その精神性はちゃんと彼女の中で生き続け、生かされているのだと思います。

そして何より、マキにはマミとのかけがえのない出会いがありました。マミが大事な存在だったからこそ、今のマキがあるわけです。もし出会ってなければ、それはまたいつか、酒でも酌み交わしながら尋ねてみようと思います。

そしてこのあと、マキに伝えるように、マミのストーリーが始まります。

(次回「と、その前に」)